

## 工學博士有坂紹藏君著「兵器考」に對する授賞審査要旨

本書は、古今東西の兵器について、其沿革を敘述したるものにして、四冊より成る、第一冊は古代篇にして、太古石器時代より近古に至るまで、一般世界の兵器について記述す、即弓、弩、石弓、刀劍、長柄諸兵器、戰機、雜兵器、軍用動物、甲冑、軍裝及び楯について、一々章を設け、日本並に東洋西洋の例を擧げて、之を説明圖解せり。第二冊は砲熯篇一般部にして、火藥火砲の發明せられてより、現代に至るまで、世界の主なる砲熯兵器について記述す、即西洋砲熯沿革、東洋砲熯沿革、日本砲熯沿革を始め、後裝砲、近世砲熯用材料、裝籜砲、砲の種類、彈丸、火藥、爆藥、火工品の各事項について説明せり。第三冊は砲熯篇海軍砲熯及小銃にして、海軍砲熯の發達、日本海軍砲熯沿革、裝甲板、西洋小銃、拳銃、日本及東洋小銃について記述せり。第四冊は近代篇にして、航空機、水雷、地雷、機關銃砲、現代の防禦兵器及偽裝法、化學兵器、戰車及軍用動物について記述せり。

今本書について見るに、著者は主力を兵器の起因變遷の究明に用ひ、古代篇は固より、近代篇の如き現代の進歩せる兵器に關する部分に於ても、尙その沿革について記述する所少からず、航空機、水雷、地雷、戰車、軍用動物等の如きに至つても、その古代に於ける起因について探究する所あり、且つその歴史的記述に於て、各部門それぞれその特殊研究の説を遍ねく採取し、その研究の結果をまと

めて、よく諸説を網羅綜合しまた各項目について新發見の材料を洩さず、よく之を利用したり。

古來兵器の沿革を記述せるものは、古くは新井白石の本朝軍器考を始めとして、近年に及びても若干これありと雖も、それ等は或種の一二の兵器に關するものにして、本書の如く兵器全般に亘り、且日本東洋西洋に涉りて記載せるものは、未だ曾て之れ有らず。

右に述べたる如く、本書の特長は、よく諸説を綜合網羅せるにあり、而もまた著者の創見にかゝるもの乏しからず、我邦古墳の短甲と古ローマ兵の甲とを比較して、我が式の遙に彼に勝れたるを認めたるが如き、或は元時代の砲に關する記述の中、元の忽必烈が、西域の人亦思馬因エシマインをして造らしめたる襄陽砲は、多くは投石機的一種なるべしとの從來の説に對し、著者は現代型式砲の原始的のものなるべしと論せるが如き是なり、また日本に於ける鐵砲の傳來について、從來普通に行はれたる天文十二年渡來説を排し、それ以前既に傳來したることを主張したるが如きは、たとへ従前既に之と同趣旨の説を發表したるものありとするも、著者はよくその材料を利用して、更に明時代の火鎗と併せ考へて、その説を確立せんとしたるものにして、また一種獨創の見たるを失はず。

要するに本書は、有史以前より現今に至るまで、また洋の東西に通じて、あらゆる兵器の沿革を比較研究し、無慮一千一百の圖を載せ、一見して兵器の變遷發達を明瞭ならしめたるものにして、かくの如きは從來未だ世に存せず、その學界に裨益する所大なるものありといふべし、但その説明の文稍

簡約に過ぎ、時に考證の不十分なるの嫌あるものなきに非ずと雖も、著者が三十年の星霜を費し、且屢歐米諸國に使用して、實物及び文獻についてその材料を蒐集し、之を綜合大成したるの功績は之を認めざるべからず。